

適性検査1

注 意

- 1 検査開始の指示があるまで問題用紙を開いてはいけません。
- 2 検査時間は四十五分間で、終わりは午前九時四十五分です。
- 3 問題は

一	問1
二	問1

 から

一	問4
二	問3

 まであります。
- 4 問題用紙は1ページから9ページまであります。
検査開始の指示後、すぐにページがそろっているかを確認かくにんしなさい。
- 5 解答用紙は二枚まいあります。
- 6 受検番号をそれぞれの解答用紙の決められた場所に記入しなさい。
- 7 解答はすべて解答用紙に記入し、解答用紙のみ二枚とも提出しなさい。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

(*印のついている言葉には、本文の後に「注」があります。)

日々をいろいろる季節や風景、住まいや家並み、人びとの姿や道具。どちらをむいても、私たちの日々をとりまく環境は、どんどん変わってきました。これからも変わりつづけるにちがいありません。変化や新しさは、時代の表情を変える力をもっています。

けれども、そう言えるのは、目に見えるものについてです。モノの変化、かたちの変化、暮らしの変化、暮らし方の変化といった目に見える変化が、わたしたちにもたらすもつとも大きな変化は、実は、目に見えないものの変化ではないか、と思います。

目に見えないものの変化というのは、すなわち言葉の変化です。言葉の変化というと、流行語や若者言葉の変化と考えられがちですが、そうではなく、言葉ほど、目に見えないものの変化を反映しているものはないのです。

ごく普通の何でもないような言葉に見える。しかし、その言葉によって、自分が生かされていると感じている言葉というのがあります。

たとえば、「梢」という言葉です。

木の枝の先を言う言葉です。「梢の隙間を洩れて来る日光が、径のそここや杉の幹へ、蠟燭で照らしたやうな弱い日なたを作つてゐた。歩いてゆく私の頭の影や肩先の影がそんななかへ現はれては消えた。なかには「まさかこれまでが」と思ふほど淡いのが草の葉などに染まつてゐた。試しに杖をあげて見ると、ささくれまでがはつきりと写つた」。梶井基次郎の「笥の話」という文章です。

こういうふうにはなぬ言葉が、私たちの見ている風景のなかに、今日なくてはならぬ言葉、心の風景をつくる言葉としてあるだろうかということを考えるのです。ふだんわたしたちはいまは木を見上げるということをしなくなっています。文章の題の「笥」も、水を引く樋をさす言葉ですが、いまは普段に見るものでなくなつて、その言葉が表していた趣というものは、わたしたちの語彙にはすでにありません。

あるいは、「しげしげ」という言葉。

「寢床から抜け出し縁側に出る。煙草に火をつけ、うらうらとした陽ざしの中へゆつくりと煙を上げる。激しい勢で若葉を吹き出している庭前の木や草を、しげしげと眺める。「俺は、今生きて、ここに、こうしている」こういう思いが、これ

以上を求め得ぬ幸福感となつて胸をしめつけるのだ。心につながるもの、目につながるもの一切が、しめやかな、しかし断ちがたい愛惜の対象となるのもこういう時だ。これは、尾崎一雄「美しい墓地からの眺め」の一節。

「しげしげと眺める」というしんとした動作から、「心につながるもの、目につながるもの」への愛惜が生まれてくる秘密が、ここにはさりげなく語られています。こういうふうな「しげしげ」という動作を表す言葉が、今日なくてはならぬ言葉、心の風景をつくる言葉としてあるだろうかということを考えます。私たちは今日ますますスピードをあげて生きることに追われて、「しげしげと目の前の風景を眺める」習慣をなくしてはいないでしょうか。そして、そのために「幸福感」をも。

もう一つ、「本」という言葉。

本という言葉は、いまでももちろん日々親しい言葉です。しかし、本という言葉が喚起する次のような感情は、いまはもう私たちに日々の親しいものではなくなっています。「その頃の本は読むものだった。古本屋にはいい本が置いてあってそれを漁って歩くのが楽しみだった。一体に本にはその匂いというものがあって本が選りすぐられたものであるに従って本の匂いがそこに漂う。その中から一冊を手に入れるのはその

匂いを持って帰るようなものだった」。これは、吉田健一『東京の昔』の一節。

活字という文字には匂いがあった。新聞には新聞の言葉の匂い、辞書には辞書の活字の匂いがありました。言葉は意味だけでできているのではなくて、文字には墨の匂い、インクの匂い、紙の手触り、風合いがありました。本を手にする、本を読むことは、そういう感覚を覚えるということでもあったけれども、そういうふうには「本」という言葉も今日では、もうなくてはならぬ言葉、心の風景をつくる言葉として、ある親身な感覚を喚起する言葉というふうではなくなっています。

本来、そのまわりにさまざまものを集めるのが、言葉の本質です。風景を集める。感情を集める。時間を集める。ヴィジョンを集める。人を集める。記憶を集める。そういう言葉を自分のなかにどれだけでも持っているかが、胸のひろさ、心のゆたかさをつくる。

こんなふうには、語彙の行く末をたずねてゆくと、そこに見えるてくるのは、わたしたちの日々の心の風景です。いまは言葉が使い捨てになつていないか、どうか。言葉を使い捨てることは心を使い捨てることです。いまは心が使い捨てになつていないか、どうか。

モノは豊富になったけれども、逆に語彙が乏しくなった。そのため、さまざまな言葉によってわたしたちがずっと得てきた心のひろがりや陰影やゆたかさ、奥行きが削られて、わたしたちの日々のあり方が狭く窮屈なものになってしまっているとするば、問題です。

言葉むなしければ、人はむなししい。語彙というのは、心という財布に、自分が使える言葉をどれだけゆたかにもっているかということ。その言葉によって、いま、ここに在ることが生き生きと感じられてくる。そういう言葉を、どれだけでもっているか。いまは、言葉のあり方というのが、あらためてそれぞれの日常に、切実に問われているときのように思われます。

(長田弘『なつかしい時間』問題のため一部改編)

〔注〕

- * 径…道のこと。
- * ささくれ…物の先端が細かく割れていること。
- * 語彙…言葉の集まりのこと。
- * 愛惜…大切にすること。名残惜しいと思うこと。
- * 喚起…呼び起こすこと。

問1

① 自分が生かされていると感じている言葉 とあります
が、同じ内容を述べている部分を二十字以上二十五字以内で抜き出し解答らんに合うように書きなさい。

問2

② 試しに杖をあげて見ると、ささくれまでがはつきり
とありすが、このようなことを試して、どのようなことが確かめられたのですか。解答らんに合うように書きなさい。

問3

③ 「幸福感」をも とありますが、この後にどんな言葉が続くと考えられますか。後に続く言葉を解答らんに合うように書きなさい。

問4

④ 言葉を使い捨てること について (1)、(2) の問いにそれぞれ答えなさい。

(1) 「言葉を使い捨てること」とはどういうことですか。

解答らんに合うように十字以上十五字以内で書きなさい。

(2) (1) で答えたようなことにならないためには、どのようなことに気を付けたらよいですか。本文の内容をふまえつつ、あなた自身の考えを次の条件にしたがって書きなさい。

条件 書き出しは一まずめから書き始めなさい。

また、文章は、五十字以上六十字以内で書きなさい。

、や。や「なども一字と数えます。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

(*印のついている言葉には、本文の後に「注」があります。)

*^① 極夜探検のために天測の準備を始めたのは、すでに出発が一カ月半後に迫った二〇一二年九月下旬のことだった。まだ夏の暑さを引きずっていたその日、私は西武池袋線沿線の自宅を出発し、自転車で家から十分ほどのところにある池袋の大型書店に向かっていた。

天測というのは簡単に説明すると、天体を利用しておこなうナビゲーション技術である。もう少し具体的に、天体の高度を測ることと言いかえることもできるだろう。六分儀などで太陽や星の高度を観測し、その観測値をもとに所定の計算をおこなう、自分のいる地球上の緯度や経度を求める一連の作業のことだ。天測で探検すると決めたのはいいが、準備を始めた時点で私はこの技術について何も知らなかった。今説明したような内容はもちろん後から調べて分かったことで、最初は天測が天体の高度を測ることだという基本的知識さえなかった。そこで、出発が近づいたその日、まずは本屋に行って手ごろな教科書がないか物色することにしたわけだ。

地下駐輪場に自転車を止め、エスカレーターで七階の理工

書コーナーに上がると、〈海事〉という書棚に様々な船舶関係の本がならんでいた。一冊一冊背表紙のタイトルを確認し、関係のありそうな本をパラパラとめくるうち、『天文航法』という、紙の箱に入った赤い布張りの、古本屋で見かけるような立派な装丁の本を見つけた。天測で海を航海する方法を天文航法と呼ぶのでタイトルのにはぴったりだ。

頁をめくって内容を確認してみると、地球の説明といった基本事項から始まり、時間と経度の関係や、緯度と経度を求めるための理論と計算方法で中身は埋め尽くされている。よし、これだ、これを読みさえすれば天測をマスターできると、私はひそかに心で拳を握りしめた。だが現実に横文字の記号や複雑そうな計算式、しばしば登場する三角関数の記号を見ていると、正直、赤く燃えあがっていたやる気の炎も急激に鎮静化するのを感じる。何しろ数学は高校二年生の途中で断念して以来、テストで二十点以上とった記憶はなかったし、今では六桁以上の数字を扱うこともめつたにない。眩暈をおぼえた私は本を閉じ、もつと別の、『小学生でも分かる天測入門』的なフレンドリーな本を探した。しかし結局そういう本は見つからず、最後は覚悟を決めて『天文航法』という本を携えてレジに向かった。

案の定、読み始めてからわずか三日で私は音を上げそうになった。そもそも机の前で居住まいを正して勉強したのが何年ぶりのことだったのか、もはや思い出すことさえできない。

『天文航法』を読み始めて最初に分かったのは、天測の方法ではなく、自分の学習能力の憂慮すべき現状だった。系統立てて知識を頭に刻み込むという作業をこの二十年ばかり怠っていたせいで、私の脳内の神経細胞の結合は相当弱まり、読んで理解したと思っても、次の日にはその内容を全部忘れていたのだ。それにこの本には数式だけではなく、〈出没方位角算法〉〈子午線高度緯度法〉〈北極星緯度法〉等々といった、甲冑をきた鎧武者のようないかめしい字面の専門用語がつきつきとあらわれる。頁をめくって次に何が書かれているのか確認するたび、私は登山で巨大な岩壁があらわれたときのような威圧感をおぼえた。だが、出発まで時間がない。毎日めげずに勉強するうち、基本原理と計算方法は何とか習得することができた。

(中略)

今回、GPSではなく、その天測を位置決定の手段として選んだのにはちょっとした経緯があった。じつは私は前年の二〇一一年に初めてカナダで極地の長い旅を経験したのだが、その旅での違和感が、今度の天測で旅をするという発想につながっ

ている。

この二〇一一年の旅は色々な意味で大変意義のある旅だった。初めて極地に向かうことにした私は、いきなり条件の厳しい冬の極夜ではなく、まずは比較的行動しやすい季節に、かつ現在オーソドックスとされる通常のやり方で旅をすることに決め、友人である北極冒険家の萩田泰永君を誘ってカナダ北極圏に向かうことにした。〈極地の旅に都合のいい季節〉というのは具体的にいえば太陽が昇ってもう十分に明るくなり、かつ海の結氷も申し分ない三月下旬から五月であり、〈現在オーソドックスとされる普通の方法〉というのはGPSとか衛星携帯電話を使い、軽量で頑丈なプラスチックの橇を引いて歩くということだ。もちろんオーソドックスな手法でも三月〜五月の北極は十分に厳しい世界で、氷点下四十度にまで冷え込む寒さのなか、われわれは北極熊がうろろする乱氷帯を越え、百キロ近い重さの橇を引いて連日のように三十キロ近く歩きつづけた。六十日後に出発地から千五十キロ南にあるジョアヘブンという集落に到着したが、旅がそこで終わったわけではなかった。五月半ばにこの集落を再出発し、今度は雪解け期でずぶずぶとなったツンドラの大湿地帯の縦断に取りかかった。氷の割れた大河をボートでわたり、泥まみれになった湿地を練り歩き、

ようやく最終目的地であるベイカーレイクにたどり着いたときには、季節はすでに初夏を迎え、無数の蚊にぶんぶんたたかれて身体中をほりほりとかきむしっていた。このように旅は期間にして百三日間、総延長で千六百キロもの長きにおよんだ。空間的な距離の移動という観点からみると、たしかにひとつの達成ではあったし、肉体的な疲労という点でも苛酷な旅だったのだが、しかし率直にいうと、私は旅をしているときからずっと、なにか届くことができていない……という虚しさを払拭できずにいた。北極熊の出現におののき、寒さに痛めつけられ、傷つき、疲労し、飢えたことは間違いない。そのことを一冊の本にもまとめたが、北極が持つ茫漠さや泥沼のような深みを体感できたかという点、そこまでは至らなかつた気がしたのだ。

(中略)

届くことができていない……と感じた一番の原因は、明らかにGPSと衛星携帯電話という二つの現代機器を使用したことにあった。GPSや衛星携帯電話を持っていくと、私と北極との間に見えない壁ができてしまう。GPSというのは人工衛星からデータを受信する機械であり、また衛星電話は最終的には他人による救助要請を前提にしている。いずれも自分以外の

力をあてにした装備だという点で共通している。自分と自然の間に、第三者たる機械が介在することで自然への没入感がどうしても弱まってしまふのだ。

とりわけGPSを使用すると北極という旅の対象への関わり方が薄くなる。GPSではなく、たとえば地図とコンパスで位置を決める場合、まわりの山や谷に目をやり、次に地図のほうに目を落とし、その山や谷が地図上のどこにあるか確認する。

このとき周囲の山や谷といったランドマークは、私という身体的な実体を空間のなかに位置付けるためのリアルな支点としての機能を果たしている。風景を見わたし、何か目印になる山の頂上や尾根筋、谷の向きなどを見つけ、それを地図のなかに見出して自分の位置を求めるといふプロセスを経ることで、周囲の風景への志向性が高まり、私と周囲の地形との間にある種の抜き差しならない関係性が生じるのである。読図でこうした作業を常時繰り返していると、私という実体は周囲のあらゆる地形と目に見えない糸で結ばれ、風景と調和し、空間のなかでがっちり安定して存在しているという感覚を得ることができるといえる。ひと言でいえば風景を自分の世界に取り込むことができるわけだ。ところがGPSを使うとこうしたプロセスが全部、抜け落ちる。別に自分で何か作業しなくても、テントのなかでは

ちつとボタンを押すだけで地図上の位置が分かるので、周囲の地形を確認する必要もない。風景に対する志向性はなくなり、何らかの関係性も生じない。風景はただ私と関わりのないものとして素通りし、無意味なものとして私の世界から抜け落ちるのだ。その結果、私は風景とのつながりを失い、北極に在るのに北極を感じることができていない、北極の本質に届くことができていないという遊離感を感じていたのだ。

(角幡唯介『極夜行前』問題のため一部改編)

〔注〕

- * 極夜：北極や南極で一日中太陽の昇らない状態が続く現象。
- * 六分儀：太陽や星の高度を観測する道具。
- * 三角関数：数学の分野の一つ。
- * 乱氷帯：海が凍り、高低差が激しくなった場所。ここでは特に歩きにくい場所を意味する。
- * ツンドラ：北極周辺の、凍結した大平原。
- * 払拭：ぬぐいさること。
- * 茫漠：広々としてとりとめのないさま。
- * 介在：二つのものの間に存在すること。
- * ランドマーク：特徴的で、目印になるものこと。
- * 遊離感：他と離れて存在するかのよう感じること。

問1

① 天測 とは何ですか。本文の言葉を用いて、三十字以上四十字以内で解答らんに合うように説明しなさい。

問2

② 拳^{こぶし}を握^{にぎ}りしめた。とありますが、なぜ筆者は拳を握りしめたのですか。その理由を次の条件にしたがって書きなさい。

条件 書き出しは一ますめから書き始めなさい。

また、文章は、三十字以上四十字以内で書きなさい。

、や。や「なども一字と数えます。

問3

筆者はGPSや衛星携帯電話などの現代機器を使用する方法と、地図とコンパスを用いて旅をする方法の両方について述べています。もし、あなたがどこか見知らぬ土地を旅するなら、現代機器を使用する方法で旅したいと考えますか。それとも地図とコンパスを用いる方法で旅したいと考えますか。どちらか一つの方法を選び、その理由とともに次の条件にしたがって書きなさい。

条件1

段落構成^{だんらく}については、次の①から③にしたがうこと。

① 二段落構成で、内容のまとめりやつながりを考えて書きなさい。

② 第一段落では、現代機器を使用した旅のよさと、地図とコンパスを用いた旅のよさ、両方のよさの要約を書きなさい。

③ 第二段落では、あなたが見知らぬ土地を旅するときに、現代機器を使用して旅をしたいと考えるか、それとも地図とコンパスを用いて旅をしたいと考えるか。その理由とともに書きなさい。

条件2

解答は原稿用紙^{げんこう}の正しい使い方^{けんこう}で書き、書き出しは一ます空けて書き始めなさい。

また、文章は、二百字以上二百四十字以内で書きなさい。

、や。や「なども一字と数え、改行などで空いたますも字数に数えます。

